

「わたしの国はこの世のものではない」

ヨハネの福音書 18 : 28~40

ヨハネの福音書は 18 章に入って、いよいよイエス・キリストの十字架の道行きの箇所に入っております。今回は、イエス様が捕らえられ、大祭司のところに連れて行かれたところを、御言葉を読み、黙想しながら味わいました。

今回は、その二回目と言う事になりまして、イエス様が、ユダヤの大祭司のところから、当時、ユダヤを支配していたローマの総督ピラトのところで裁判を受ける場面です。

使徒信条を読むことができますが、このようにあります。

## 使徒信条

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず  
我はその独り子、我らの主イエスキリストを信ず  
主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生れ  
ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け  
十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり  
三日目に死人のうちよりよみがえり  
天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり  
かしこより来たりて  
生ける者と死ねる者とを審(さば)きたまわん  
我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり  
罪の赦し、身体のよみがえり、永遠の生命を信ず  
アーメン

「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊（せいれい）によりてやどり、処女(おとめ)マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府(よみ)にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり、かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審（さば）きたまわん。我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し(ゆるし)、身体（からだ）のよみがえり、永遠(とこしえ)の生命(いのち)を信ず。アーメン。」

使徒信条は、二世紀後半、すなわち、このヨハネの福音書が書かれて 100 年たっていない内にすでに教会で告白されていたと言われ、教会にとっては、実は、聖書と並ぶ程に、古い歴史を持つのであります。

教会は、当初から、「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」と告白されてきたのです。

この大切な使徒信条の中に個人名としては、マリヤとピラトのみです。しかも、ピラトはその苗字と名前が書かれて、ある意味、マリヤ以上の扱いであります。

まず、今日は、ピラトにスポットライトをあてて、このへんの事情をご紹介しながら、イエス様の、この十字架の道行きの、いわば二回目の、この箇所の意味を深く味わってまいりたいと思うのです。

あらためて最初のところを読みますので、しばらく黙祷して、この箇所を想像し味わいましょう。

「18:28 さて、彼らはイエスをカヤパのもとから総督官邸に連れて行った。明け方のことであつた。彼らは、過越の食事が食べられるようにするため、汚れを避けようとして、官邸の中には入らなかった。18:29 それで、ピラトは外に出て、彼らのところに来て言った。「この人に対して何を告発するのか。」18:30 彼らは答えた。「この人が悪いことをしていなければ、あなたに引き渡したりはしません。」18:31 そこで、ピラトは言った。「おまえたちがこの人を引き取り、自分たちの律法にしたがってさばくがよい。」ユダヤ人たちは言った。「私たちはだれも死刑にすることが許されていません。」18:32 これは、イエスがどのような死に方をするかを示して言われたことばが、成就するためであつた。」(黙祷)

当時、ユダヤは、ローマに支配されておりました。ユダヤにはヘロデ大王と言われる王様がいましたが、その王が死んでからは、ローマは、王を立てることを許さず、ユダヤを 3 つに分割して、さらには、それぞれのところに立てられた者を王と言わず、領主として支配させました。それは、王の力を弱めるためです。前回、大祭司の毎年替えて、大祭司の権威を弱めたと同じように、ローマはたくみな政策を持って、ユダヤに限らず各地をこのように支配していったのです。そして、総督と言われる、実質、王のような支配者を立てました。それが、紀元 26 年～36 年まで支配した、ピラト、ポンテオ・ピラト総督です。このように、イエス様は、大祭司カヤパの公邸から、ローマの総督官邸に連れて行かれました。

ピラトは、祭司らにつれてこられたイエス様について、罪状は？と尋ねます。祭司らは、罪がなかったら連れてきませんよと言います。

ピラトは、彼らの思惑を、おそらく知っていて、これが宗教上の問題だと判断し、自分たちで解決せよと言います。

ピラトは、ユダヤ人にとっての、宗教上の問題に、深入りしたくなかった一方で、ユダヤ人にとっては、なんとしても、ローマによって裁いてもらいたい理由がありました。それは、イエス様を死刑にしてもらいたかったからです。「私たちの国の律法では死刑に出来ないから」と言います。それが、理由でした。ここには、ローマ側とユダヤ人側の間でおもわくが入り乱れています。

この間に、おそらく 6 時間以上の時間が費やされとも言われます。そのへんの雰囲気は、ヨハネが、一旦、総督は、官邸に入って、イエス様に直接、面談して個人的に取り調べる場面を描くところからわかります。

ピラトとの会話は、このようなものでした。黙想しながら聞きましょう。



「18:33 そこで、ピラトは再び総督官邸に入り、イエスを呼んで言った。「あなたはユダヤ人の王なのか。」 18:34 イエスは答えられた。「あなたは、そのことを自分で言っているのですか。それともわたしのことを、ほかの人々があなたに話したのですか。」 18:35 ピラトは答えた。「私はユダヤ人なのか。あなたの同胞と祭司長たちが、あなたを私に引き渡したのだ。あなたは何をしたのか。」 18:36 イエスは答えられた。「わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。」 18:37 そこで、ピラトはイエスに言った。「それでは、あなたは王なのか。」 イエスは答えられた。「わたしが王であることは、あなたの言うとおりです。わたしは、真理について証しするために生まれ、そのために世に来ました。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」 18:38 ピラトはイエスに言った。「真理とは何なのか。」 こう言ってから、再びユダヤ人たちのところに出て行って、彼らに言った。「私はあの人に

何の罪も認めない。」黙想しましょう。正確に言うと、死刑については、ユダヤでも石打の刑がありますが、十字架刑という残酷な刑を民衆に見せることで、イエス様になびいた民衆の心を完全にくじけさせたいと思ったのかも知れません。

### ローマの思惑(おもわく)

関わりたくない＝「ユダヤの内政干渉をしたくない。」

### 祭司たちの思惑(おもわく)

イエス様を死刑にしたい＝「イエスは、ユダヤの王になろうとしている。それはローマに国家反逆罪ですね。」

### 神の意図(いと)＝ヨハネの伝えたいこと

「18:32 これは、イエスがどのような死に方をするかを示して言われたことばが、成就するためであった。」

しかし、私たちは黙想するとき、ここには、単に、ユダヤの思惑だけでなく、またローマの考えだけでもなく、じつは、それ以上のこと、すなわち、神の思惑といましようか、神の考えがあったことを、ヨハネは、私たちに悟らせるのです。

この箇所では、ピラトが、イエス様に「あなたはユダヤ人の王なのか」と問う場面が出てきます。これは、ユダヤ側が、いわば、この6時間にも及ぶ、説得の結果、ローマのピラトに与えた言葉だと思われます。それは、ユダヤ人の王と言うことであれば、ローマのピラトは、国家反逆罪を適応して、イエス様を殺すことが出来るからです。しかし、イエス様は、その意図まで、よく理解していました。ですから、それは、あなたの言葉なのか？と聞き、ユダヤに言わせられているのではないかと指摘されたのです。

ですから、ピラトは、私は、ユダヤ人の思いの代弁者ではないと否定します。

35節でピラトの言う「わたしはユダヤ人なのか」というのは、ローマはたくみな方法でユダヤを支配しているつもりだが、ユダヤの反発をくらっては、ローマの本部から、支配の能力を疑われて、ユダヤ総督としての地位を奪われるのではないかという本音を、すなわち、心の奥に潜む、彼の心の弱さ、あるいは罪を、イエス様から、正確に指摘されて、戸惑った様子を表しているのではないのでしょうか。

神は、キリストは、いつも、私たちの罪の心、その本音を見定めることがお出来るようになるのです。神の御前では、私たちの思いは丸裸であることを、知らなければならないのです。そして、私たちの、いわゆる「人の思惑」は、神の御前では、一時、なにかうまくいっているように見えても、けっして、成就しないこと、この世ではいつも勝利者は神でありキリストであることを、クリスチャンは理解しなければならないのです。私たちが人間的な思いで、うまくいったと思っているときで

え、神の御心こそが、実は、すすめられているのだという、私たちの人生における、あるいは、大きく歴史を導きたもう、神の摂理、神の意志があるということを私たちは、悟り、また、慰められ、また、確信して歩まねばならないのであります。

人間がどんなに騒ごうが、あらゆる知恵を使って策略を巡らそうが、ただ、ただ神の御旨のみがなるという事であります。

そして、最終的には、この神の意思、すなわち、「イエスのことばが成就するため」であるということです。32 節の、「イエスのことば」の成就とは、例えば 12：32 で、イエス様が「12:32 わたしが地上から上げられるとき、わたしはすべての人を自分のもとに引き寄せます。」とおっしゃられたその言葉であります。

ここで、「引き上げられる」とは、十字架にあげられるということです。そして、すべての人とは、私たちを含む、すべての罪人であり、キリストを信じる人のことです。また「引き寄せる」とは、その人たちに、永遠の命を与え、天国に引き寄せる、導くということであります。

王かと尋ねるなら、私は王だとイエス様は、お答えになります。そして、37 節で、「真理について証しするために生まれ、そのために世に来ました。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」と言われました。

少し、難しいことを言いますが、当時、ローマギリシャ世界には、ギリシャの学問が浸透していて、良く知られているのは、ストア派の教えですが、「懐疑主義」の教えがありました。

それは、いわば、生きる意味がわからない、いや、わからないのでいいのだという(自分が見ている世界と他人のしている世界は違うという相対主義の立場をとり、そのため哲学的に正しい態度とは、判断を留保(エポケー)することだと考えた。)、人生への、あるいは、真理の存在そのへの「あきらめ」があったと言われます。





ピラトが、「真理とは何か」と言い残して、イエス様の下を去るとき、そこには、人としてのあきらめ、また、真理を知る事など出来ない、なんのためにきているのかわからないという、絶望や、生きる事の空しさがあるのかもしれない。

しかし、ピラトは、同時に、そこまで、人の心の問題に迫り、そ

こに「私は会という持っている」と言われるイエス様に、魅力を感じつつ、しかし信じ切ることが出来ずに戸惑いながら、まるで、それは、イエス様への信仰告白でもあるかのように、6時間の説得にもかかわらず、最後の勇気をふるって、「わたしは、この人に罪を認めない」と、祭司らに向かって、ユダヤ人に向かって宣言するのです。そして、一人をゆるそうと思う、イエスか、それとも強盗バラバか、群衆は、バラバをと言ひ、イエスを殺せと言います。黙想しましょう。

「18:39 過越の祭りでは、だれか一人をおまえたたちのために釈放する慣わしがある。おまえたちは、ユダヤ人の王を釈放することを望むか。」18:40 すると、彼らは再び大声をあげて、「その人ではなく、バラバを」と言った。バラバは強盗であった。」黙想しましょう。

何を思ったのでしょうか。何を私たちは悟ったらいいのでしょうか。まず、私も、イエスを王と出来ない、うたがい深い、真理をあきらめ、神を認めることが出来ない、神をキリストを信じることができない群衆の一人であるということです。

そして、決意したいということでもあります。イエス様を誰が馬鹿にし、否定し、拒否しても、私たちは、このキリストに従うとです。

今週の歩み。この世の思惑の中で、まっすぐ神を信頼して、キリスト者である事を告白して歩めないことがあるかも知れません。しかし、そのとき、それでも、ピラトを導き、御心を行ってくださった、真理であるキリストをこそ信頼し、恐れずに、神の栄光のために、人の思惑ではなく、神の思いに、まっすぐに応え歩むこの週でありましょう。